



第6回 ボランティアとの関わり

支える会は、多くの人たちの支援と善意に支えられているため、はなの家には児童福祉関係以外の見学者やボランティアなど実に多くの人たちが出入りしている。対応に追われることも少なくない。しかし、そういった環境を落ち着かないと感じられるか、オープンと捉えられるかは、出入りする人たちがどれだけファミリーホームを理解して関わろうとしているかによる。

ファミリーホームは、そこで暮らす子どもやその養育者にとっては家庭であり生活の場である。ボランティアの出入りは、思春期の子どもたちにとっては快く思われない場合もある。また、子どもが素の自分をさらけ出し、抱える課題が噴出してしまふことや、ここに来るまでの育ちの経過など個人情報飛び交うこともある。子どもへの偏見が助長されたり個人情報が外部に漏れたりしないように、子どもたちがいる生活の場に外部の人たちを受け入れる際には、あらかじめ子どもの状況について率直に伝えておく必要があると思っている。

中・高生男児の胃袋を満たすための分量の食事とそこに割く時間は容易ではないことから、現在ボランティアをお願いしていることの中核は、夕食づくりである。始めるにあたり最も大切なことは、子どもたちへの説明と理解を得ることである。そうでなければ、子どもたちにとっては「嫌なこと」になってしまう。当初は「お客さんがいると緊張する。落ち着いて食べられない」という意見もあったが、回を重ねるごとに交流も深まり「顔見知りのおじさん、おばさん」として受け入れられるようになってきた。また、この日のために子どもたちに予定を合わせるようにとは言わないが、食事のクオリティーも普段と違うことから集合する傾向がある。

ボランティアとの関わりは、子どもたちには市民感覚が醸成され、私たちにとっては鈍くなっていた市民感覚を呼び戻してくれる機会となっている。そして何よりも社会的養護に対する協力者となってくれていることに感謝したい。

第7回 チームワークでの養育

支える会は、ファミリーホームを含めて3つの事業を展開している。それぞれが独立し主体的に活動しているが、連携することで更に機能強化につながっている。

特に星の家との関係では、スタッフ間の情報を共有するために定期的なケース会議が月2回実施され、子どもたちの状況の報告や問題の共有をすることで、困りごとの対応など安心して相談できる場となっている。また、養徳園の支援も受けている。月2回の里親支援専門相談員との交流、施設内研修への参加、行事への参加などがあるが、施設長である福田氏には子どもたちへの直接的な関わりをお願いすることもある。これらのことが養育の孤立化を防いでくれている。